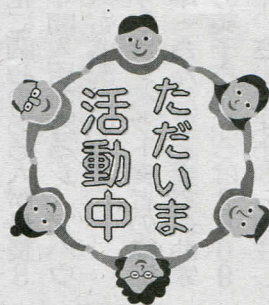


名所 和装でおでかけ



衣で北浦和アートさんぽ」に参加する人々たちだ。

大半がフェイスブックやホームページ、タウン誌などの呼びかけをみて来た参加者で、初対面同士が多い。県内外から集まり、年齢層も子どもから高齢者まで幅広いが、「浴衣、すてきな色ですね」「帯はどこで買った？」などと会話は弾む。和気あいあいとした雰囲気です。

約2か月に1回のペースで開く例会は、これまで武蔵一宮氷川神社や大宮盆栽村、ひ

日曜の午後、さいたま市浦和区のJR北浦和駅改札口。薄手の着物や浴衣に身を包んだ男女25人ほどが集まってきた。さいたま市の名所を巡る着物愛好家団体「さいたま着物さんぽ」の第12回例会「浴

約2か月に1回のペースで開く例会は、これまで武蔵一宮氷川神社や大宮盆栽村、ひ

さいたま着物さんぽ（さいたま市）

な人形店など市内で和装にマッチした場所を巡ってきた。

この日は同市中央区の会席料理店「二木屋」（国登録有形文化財）まで15分歩き、開催中の郷土玩具展を鑑賞した。ひな人形などの鮮やかな色彩と着物が調和する。併設のカフェでかき氷を食べた後、近くの県立近代美術館でヘアメイクアップアーティストの個展を堪能した。

初めて参加した北本市の小学1年・磯崎公輔さん(10)はネット通販でそろえた紺の着物にえんじの帯を締め、「母が楽しそうなので、参加してみた。着てみると発見がある」、母・由美子さん(48)は

初めに参加した北本市の小学1年・磯崎公輔さん(10)はネット通販でそろえた紺の着物にえんじの帯を締め、「母が楽しそうなので、参加してみた。着てみると発見がある」、母・由美子さん(48)は

「15年前から機会があれば着ている。帯留めの船のマークもかわいい」と話す。

さいたま市北区の会社員・角孝平さん(36)は紺の浴衣姿で、長女・玲子ちゃん(5)と長男・誠一郎ちゃん(3)に基平を着せ、「着物の良さを知ってほしい」と願う。参加5

現代の楽しみ方広げる

回目という米国出身の英語教師マイケル・クーリッジさん(26)は茨城県ひたちなか市から訪れ、「緑色の羽織はリサイクルショップで買った。日本の舞踊と映画に興味があり、着物で歩けるのはうれしい」と楽しんでた。

(佐伯和宏)

前に撮影の仕事で着付け教室に行き興味を持ち、月1回教室に通い始めた。和装で食事や観劇を重ねるうちに、「大胆な柄や色でも、着物だと組み合わせで着こなせる面白さ」に魅了された。「ゲームのように着物と帯、小物などの組み合わせを考えるとワクワクするようになった」という。

ただ、呉服小売市場は縮小傾向にある。矢野経済研究所によると08年の市場規模は4065億円だったが、17年には2710億円と3割以上減った。岩瀬さんは「着物は美しく、生地にも特徴があり、捨てるのはもったいない。ネットで中古や小物が安く買える時代なので、敷居を低くして現代の楽しみ方を広げたい」と話す。



「さいたま着物さんぽ」例会の参加者たち（さいたま市中央区で）

郷土玩具を眺める浴衣や甚平姿の親子連れ（さいたま市中央区の二木屋で）

【こんな団体】例会に多くの人に参加しやすいように、会員制はとっていない。参加者はスタート地点に直接行けばいい。参加無料で、懇親会などは実費。メキシコや中国など海外出身者も参加しており、和装愛好家が集まる他団体とも連携している。

詳細はホームページ (<https://kimono-sanpo.themedia.jp/>) で。